

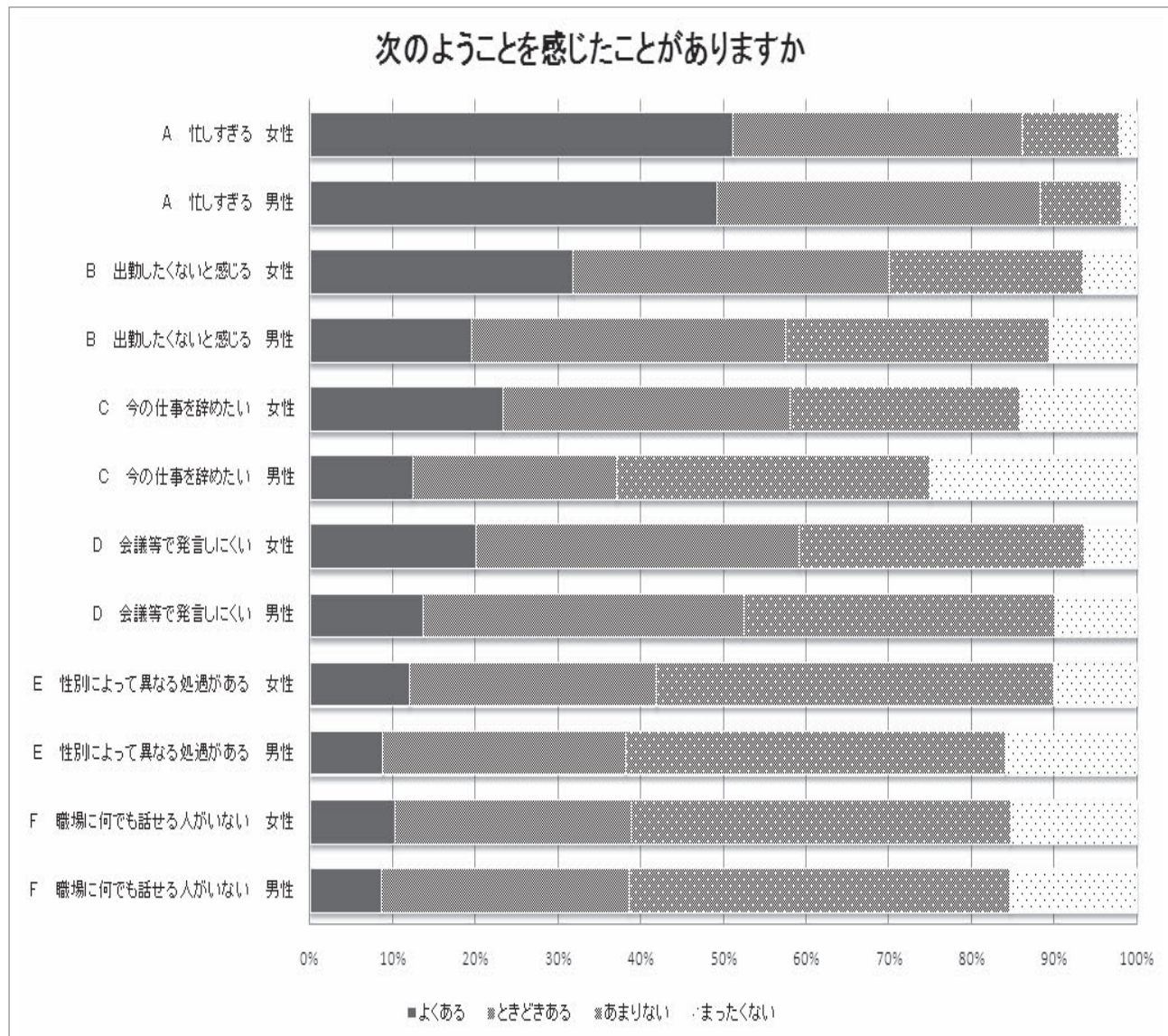
## 4. ワークについて

### 仕事上のストレス

問 12 では、仕事上のストレスに関する経験の有無を聞いている。結果を男女別にまとめたのが以下の図である。まず、男女ともに、A「忙しすぎる」と感じていることがわかる（女性「よくある」が51.1%、「ときどきある」が35.0%、男性「よくある」が49.1%、「ときどきある」39.0%）。

また、B「出勤したくないと感じる」（女性「よくある」が31.7%、「ときどきある」が38.2%、男性「よくある」が19.5%、「ときどきある」が38.0%）、D「会議等で発言しにくい」（女性「よくある」が20.1%、「ときどきある」が39.0%、男性「よくある」が13.6%、「ときどきある」が38.8%）について「よくある」、「ときどきある」と回答する人が多く、仕事上のストレスを感じる人が多いようである。

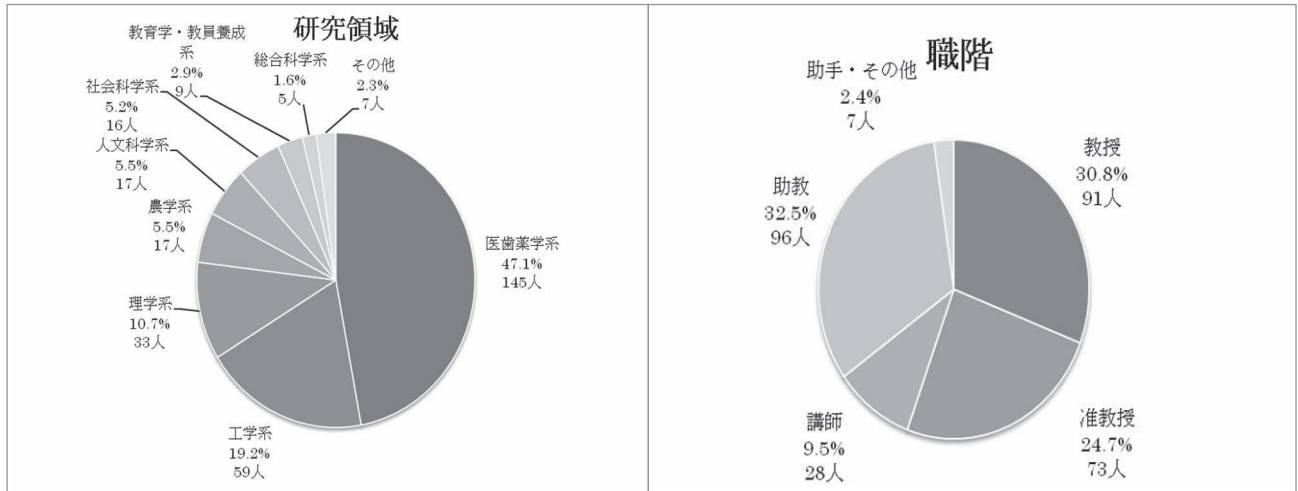
さらに女性は男性よりも、B「出勤したくないと感じる」、C「今の仕事を辞めたい」、D「会議等で発言しにくい」、E「性別によって異なる処遇がある」と感じる傾向がある。特にC「今の仕事を辞めたい」については男女差が大きい（女性「よくある」が23.3%、「ときどきある」が34.7%、男性「よくある」12.4%、「ときどきある」が24.7%）



大学教員の研究・業務環境

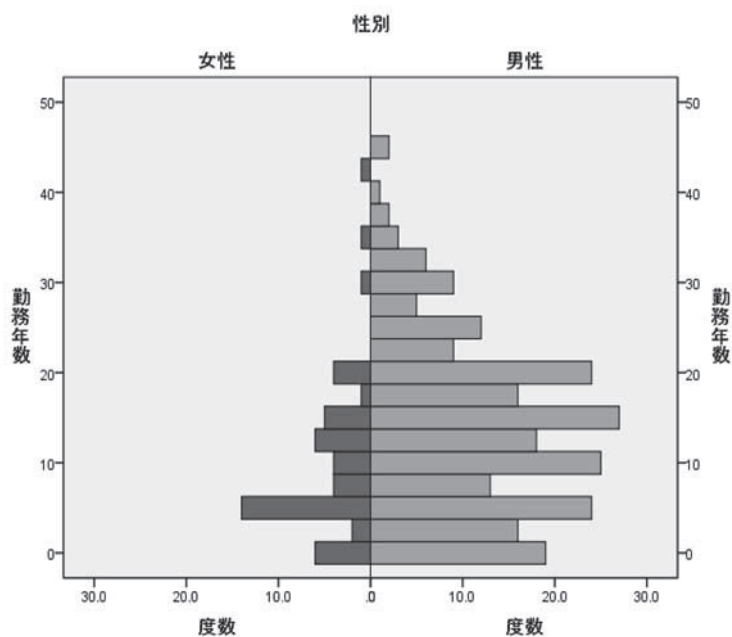
問 4 では大学教員、非常勤の研究者に、研究領域を聞いているが、その結果をまとめたものが左下の図である。医歯薬学系が 47.1% (145 人) と半分近くを占め、工学系 19.2% (59 人)、理学系 10.7% (33 人) が続く。

問 5 から問 7 では大学教員のみ職階や、教育研究活動について聞いている。問 5 の職階についての右下図では、教授と助教の占める割合が高い。

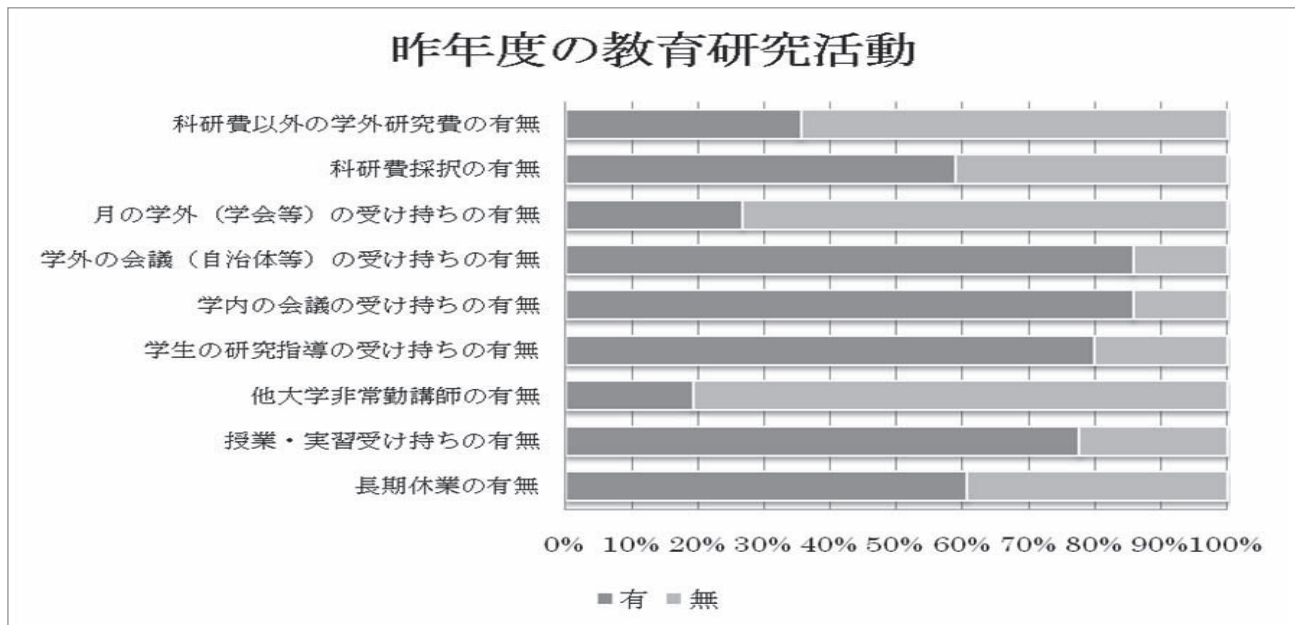


問 6 では大学教員のみ、研究キャリアの年数 (初めて大学・研究機関等に勤めてからの通算年数) を聞いている。それを性別にまとめたのが次の図である。男女ともに 20 年以下の人数が多いという共通点があると同時に、女性では 20 年以上のキャリアを持つ人数が男性と比べて少ない。平均年数を計算すると、男女計で 13.7 年、女性で 10.3 年、男性では 14.4 年となる ( $t=2.027(278)$   $p<0.01$ )。また、出産・育児による中断があった人は 17 人 (女性が 10 人と男性が 7 人)、中断年数は半年から 5 年程度であり、1 年という人が最も多く 11 人であった。

研究キャリアの年数



問7では大学教員のみ、前年度（平成20年度）1年の教育・研究活動、また会議等への出席について聞いている。教育・研究活動、また会議等の有無についてまとめたのが下図である。



#### 教育研究活動の男女差はあるか

さらに、前年度の教育・研究活動、また会議等の平均値等をまとめると以下の表のようになる（学生指導時間が週360時間など論理的に多すぎる外れ値は欠損値として処理している）。

#### 昨年度の教育研究活動

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
週出勤日数（学期中）	270	0	7	5.22	.972
週出勤日数（長期休暇中）	162	1	7	4.76	1.151
授業・実習のコマ数	211	1	20	3.88	3.149
他大学非常勤講師のコマ数	51	1	5	1.39	.814
学生の研究指導の時間数	214	1	50	8.89	8.585
月の学内の会議数	240	1	30	3.91	3.927
月の学外（自治体等）の会議数	70	0	5	1.40	.995
月の学外（学会等）の会議数	158	1	5	1.25	.872
昨年度の国内出張の日数	268	0	120	12.58	14.902
昨年の海外出張の日数	260	0	300	4.85	22.217
昨年度の論文数	269	0	20	2.24	2.731

これらの教育研究活動、また会議等については、男女での研究などの業績差が議論されており（加野1988、登谷・坂東1985、塩田1984他）、一般に男性の方が論文などの業績が高いと指摘されることが多い。また、一口に業績といっても、授業コマ数など教育活動については女性が高く、論文数や、社会的活動では男性が高いなど、性別で業績の高い分野が異なると指摘されることもある（米澤2007：131-132）。

そこで、今回の調査で、これらの業績が性別で異なるか見るために、これらの業績を従属変数（被説明変数）として、重回帰分析を行った。独立変数（説明変数）には、性別、勤務年数、専攻分野、職階を使用した。全ての教育・研究活動、また会議等について分析を行ったが、スペースの都合上、モデル全体が5%水準で有意であったもののみを載せている（ただし、今回の調査は標本調査ではなく、またどの分析結果の決定係数 $R^2$ も高くないため、あくまで試論として読んでほしい）。

使用した独立変数について、性別は、女性を0として、これを基準とし、男性を1として独立変数に投入し、男女でどちらが、教育・研究活動が活発かをみる。

ただし、教育・研究活動については、研究キャリア、研究分野、職階によって大きく活動の形態が異なるので、単純に男女を比較することはできない。例えば論文数でいえば、大学に勤務してからのキャリアが長いほど、研究能力が高くなることも予測され、論文数が増えるとも考えられる。また一般に文系と理系では、共著が多いため、理系において論文数が多いと言われることもある。文系、理系と言ってもさらに研究分野ごとによって様々だろう。また、教授など職階が高くなれば、研究室のスタッフや大学院生の数が多くなり、論文数が多くなるかもしれない。

そこで、研究キャリアを表わす統制（コントロール）変数として、初めて大学・研究機関等に勤めてからの通算の勤務年数を使用した。また、研究分野では、人数の多い医歯薬学系を基準として、工学ダミー、理学ダミー、農学ダミー、人文社会科学ダミー、教育総合科学ダミーを作成した。また、職階では人数の多い助教・助手・その他を基準として、教授ダミー、准教授ダミー、講師ダミーを作成した。

重回帰分析の結果を業績ごとに表わしたのが次ページの表である。5%を有意水準とし、結果を見ていくと、授業・実習などのコマ数については、人文社会科学ダミーが有意となった。ここから、基準となる医歯薬学系と比べると、人文科学、社会科学を専門としている教員は授業・実習などのコマ数が多い。しかし、性別に関しては男女の差はいえない。

学生の研究指導の時間については、工学ダミー、農学ダミー、人文社会科学ダミーが有意となった。医歯薬学系と比べて、工学、農学を専門としている教員は、研究指導の時間が長い。一方偏回帰係数がマイナスであるので、人文科学、社会科学を専門とする教員は医歯薬学系よりも、研究指導の時間は短い傾向があるようだ。一方で、性別に関しては男女の差はいえない（ただし、10%水準では有意）。

学内の会議については、教授ダミーのみが有意となった。これは基準となる助教・助手・その他に比較して、教授であれば、学内の会議数が多いということを示している。しかし、性別に関しては男女の差はいえない。

国内出張については、工学ダミーが有意であることから、工学の教員は、医歯薬学系よりも国内出張の日数が多く、また教授ダミーが有意なので、教授は助教・助手・その他に比較して、国内出張日数が多いということを示している。性別に関しては男女の差は見られない。

昨年度の論文数に関しては、理学ダミー、人文社会科学ダミー、教育総合科学ダミーが有意となっており、偏回帰係数がマイナスであるので、医歯薬学系よりもこれらの分野では論文数が少ない。また、教授ダミー、准教授ダミー、講師ダミーがいずれも有意であるので、助教・助手・その他に比較して、教授等では論文数が多くなっていることが分かる。しかし、性別に関しては男女の差はいえない。

以上の分析から分かるように、教育・研究活動・会議等の活動業績については、研究分野や職階の影響はあるが、男女でどちらが高いということとはできない。

従属変数	授業・実習のコマ数		学生の研究指導の時間	
	非標準化偏回帰係数	標準化偏回帰係数	非標準化偏回帰係数	標準化偏回帰係数
独立変数				
(定数)	3.44 **		3.83 *	
性別	-0.50	-0.06	3.12 †	0.13
勤務年数	0.02	0.07	0.08	0.08
工学ダミー	-0.10	-0.01	4.74 **	0.24
理学ダミー	1.31 †	0.14	2.91	0.11
農学ダミー	0.23	0.02	5.16 *	0.16
人文社会科学ダミー	1.55 *	0.17	-4.95 *	-0.18
教育総合科学ダミー	0.93	0.06	-0.17	0.00
教授ダミー	0.25	0.04	-0.50	-0.03
准教授ダミー	0.25	0.04	1.60	0.08
講師ダミー	-1.36	-0.12	-2.09	-0.06
R <sup>2</sup>	0.086 *		.197 **	
調整済みR <sup>2</sup>	0.036		.155	
N	254		203	
**1%水準で有意 *5%水準で有意 †10%水準で有意				
従属変数	学内の会議数		国内出張の日数	
	非標準化偏回帰係数	標準化偏回帰係数	非標準化偏回帰係数	標準化偏回帰係数
独立変数				
(定数)	2.590 **		7.683 *	
性別	.491	.045	1.920	.047
勤務年数	-.035	-.082	-.145	-.091
工学ダミー	-.828	-.088	7.777 **	.206
理学ダミー	-.375	-.031	3.343	.069
農学ダミー	-.409	-.026	4.382	.068
人文社会科学ダミー	-.233	-.019	3.142	.064
教育総合科学ダミー	.170	.009	2.258	.032
教授ダミー	4.155 **	.503	7.536 *	.231
准教授ダミー	.953	.108	3.020	.086
講師ダミー	.060	.004	.147	.003
R <sup>2</sup>	.174 **		.094 **	
調整済みR <sup>2</sup>	.136		.056	
N	228		253	
**1%水準で有意 *5%水準で有意 †10%水準で有意				
従属変数	昨年の掲載論文数			
	非標準化偏回帰係数	標準化偏回帰係数		
独立変数				
(定数)	1.019 *			
性別	.618	.082		
勤務年数	-.017	-.058		
工学ダミー	-.683	-.099		
理学ダミー	-2.002 **	-.225		
農学ダミー	-1.182	-.100		
人文社会科学ダミー	-2.806 **	-.310		
教育総合科学ダミー	-2.458 **	-.194		
教授ダミー	3.234 **	.541		
准教授ダミー	2.603 **	.408		
講師ダミー	1.411 *	.145		
R <sup>2</sup>	.215 **			
調整済みR <sup>2</sup>	.183			
N	228			
**1%水準で有意 *5%水準で有意 †10%水準で有意				